

【 復活讃詞 第4調 】

しゅのおんなでしはふくかつのひかるおと  
主女弟子は復活の光お音  
づれをてんしよりききうけて、  
天使聞き受  
げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒  
原祖定罪を振棄使徒  
にほこりていえり、しはほろぼさ  
誇り日死滅  
れ、ハリストスかみはふくかつして、せかいに  
神復活して世界  
おおいなるあわれみをたまえり。  
大憐賜

【 克肖女マリヤの讃詞 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。  
光榮父と子聖神歸  
ははよ、なんちのうちにかみのぞうによるもの  
母爾内神像由者  
はたしかにすくわれたり。けだしなんちは  
確救蓋爾  
じゅうじかをとりにてハリストスにしたがい、すぎ  
十字架執従過  
やすきからだをかるんじ、ふしのものたる  
易體輕不死者

たましいのたぬにおもんぱかることをおこない  
 靈 爲 慮 行  
 をもつておしえた。ゆえにこくしょうなる  
 以 教 故 克 肖 なる  
 マリヤよ、なんぢのしんはしよてんしとともによ喜  
 爾 神 諸 天 使 偕 喜  
 ろこびたもう。  
 給

【 克肖女マリヤの小讃詞 第3調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世 に、アミン。  
 さきにいんこうにふけりたるものはいまはつ痛  
 先 淫 行 耽 者 今 痛  
 うかいによりてハリストスのよめとあらわれ、  
 悔 由 聘 女 現  
 てんしのどせいにならいて、じゅうじかのぶき器  
 天 度 生 效 十 字 架 武 器  
 をもつてあつきをほろぼす。ゆえに  
 以 悪 鬼 滅 故  
 しえいなるマリヤよ、なんぢはてんのくにの  
 至 榮 爾 天 國  
 よめとあらわれたり。  
 聘 女 現

【 聖三の歌 】

代禱) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>けいけん</sup>敬虔なる<sup>もの</sup>者を<sup>すく</sup>救い、<sup>およ</sup>及び<sup>われら</sup>我等に<sup>き</sup>聆き<sup>たま</sup>給え、



しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ  
主 敬 虔 者 救 及 我  
らにききたまえ。  
等 聆 給

代禱) <sup>よよ</sup>世世に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖 神 聖 勇 毅 聖  
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常 生 者 我 等 憐  
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖 神 聖 勇 毅 聖  
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常 生 者 我 等 憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖 神 聖 勇 毅  
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖 常 生 者 我 等 憐  
れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を  
 殺 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。

【 提綱 (プロキメン) 主日第4調及び克肖女の第4調 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅ なんぢ しわざ なん おお みなちえ もつ つく</sup> プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅ よ、 なんぢの しわざは なんぞお お き、  
 主 爾 工業 何 大

み な ち え を も っ て つ くれ り 。

皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>わ たましい しゅ ほ あ しゅわ かみ なんぢ いた おおい</sup> 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ、 なんぢの しわざは なんぞお お き、  
 主 爾 工業 何 大

み な ち え を も っ て つ くれ り 。

皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>かみ なんぢ なんぢ せいしょ おい おごそか</sup> 神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり、



【 使徒經 (アポストロス) 321 半端 エウレイ書9章11節~14節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが<sup>じん たつ</sup> エウレイ人に<sup>しよ よみ</sup> 達する書の讀、

代禱) <sup>つつし</sup> 謹みて<sup>き</sup> 聴くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>しょうらい</sup> ハリストス、<sup>ふく</sup> 將來の福の<sup>しさいちよう</sup> 司祭長は<sup>きた</sup> 來りて、<sup>さら</sup> 更に<sup>おおい</sup> 大に、<sup>さら</sup> 更に<sup>ぜんび</sup> 全備なる<sup>まく</sup> 幕、  
<sup>て</sup> 手の<sup>つく</sup> 造る<sup>ところ</sup> 所に<sup>あら</sup> 非ず、<sup>すなわち</sup> 即其<sup>その</sup> 造式に<sup>あらざ</sup> 非る者に<sup>よ</sup> 縁りて、<sup>おやぎ</sup> 牡山羊と<sup>わかき</sup> 牡犢との<sup>ち</sup> 血を<sup>もつ</sup> 以て  
<sup>あら</sup> するに<sup>すなわち</sup> 非ず、<sup>おのれ</sup> 乃己の<sup>ち</sup> 血を<sup>もつ</sup> 以て、<sup>ひとたび</sup> 一次<sup>せいしよ</sup> 聖所に<sup>い</sup> 入りて、<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>あがない</sup> 贖を<sup>え</sup> 獲たり。<sup>けだしも</sup> 蓋若  
<sup>おうし</sup> し<sup>おやぎ</sup> 牡牛と<sup>ち</sup> 牡山羊との<sup>およ</sup> 血、<sup>わかき</sup> 及び<sup>めうし</sup> 牡犢の<sup>はい</sup> 灰は、<sup>けが</sup> 穢れたる<sup>もの</sup> 者に<sup>そそ</sup> 灑がれて、<sup>これ</sup> 之を<sup>せい</sup> 聖にし、<sup>にくたい</sup> 肉體  
<sup>けつじよう</sup> の<sup>いた</sup> 潔淨を<sup>いわん</sup> 致さば、<sup>せいしん</sup> 況や<sup>よ</sup> 聖神に<sup>よ</sup> 由りて、<sup>きず</sup> 瑕なくして、<sup>おのれ</sup> 己を<sup>かみ</sup> 神に<sup>ささ</sup> 獻げし<sup>ち</sup> ハリストスの<sup>ち</sup> 血は、  
<sup>われら</sup> 我等の<sup>りようしん</sup> 良心を<sup>し</sup> 死の<sup>おこない</sup> 行より<sup>きよ</sup> 潔めて、<sup>い</sup> 活ける<sup>まこと</sup> 眞の<sup>かみ</sup> 神に<sup>ほうじ</sup> 奉事せしむるをや。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうか。

\*\*\*\*\*

【 使徒經 (アポストロス) 208 端 ガラティヤ書3章23節~29節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが<sup>じん たつ</sup> ガラティヤ人に<sup>しよ よみ</sup> 達する書の讀、

代禱) <sup>つつし</sup> 謹みて<sup>き</sup> 聴くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>しん</sup> 信の<sup>きた</sup> 來らざる<sup>さき</sup> 先には、<sup>われら</sup> 我等<sup>りつぼう</sup> 律法の下に<sup>もと</sup> 護られ、<sup>まも</sup> 閉されて、<sup>とざ</sup> 信の<sup>しん</sup> 顯るる<sup>あらわ</sup> を<sup>ま</sup> 俟

てり。斯<sup>か</sup>く律<sup>りつぽう</sup>法<sup>われら</sup>は我<sup>われら</sup>等<sup>しん</sup>をハリストス<sup>しん</sup>に導<sup>みちび</sup>く師<sup>しふ</sup>傅<sup>しふ</sup>たりき、我<sup>われら</sup>等<sup>しん</sup>信<sup>よ</sup>に由<sup>ぎ</sup>りて義<sup>ため</sup>とせられん爲<sup>な</sup>なり。信<sup>しん</sup>の來<sup>きた</sup>りし後<sup>のち</sup>、我<sup>われら</sup>等<sup>しん</sup>は已<sup>すで</sup>に師<sup>しふ</sup>傅<sup>もと</sup>の下<sup>あ</sup>に在<sup>けだし</sup>らず。蓋<sup>なんぢら</sup>爾<sup>みな</sup>等<sup>しん</sup>皆<sup>しん</sup>ハリストス<sup>しん</sup> イイスス<sup>しん</sup>を信<sup>しん</sup>ずるに由<sup>よ</sup>りて神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>なり。爾<sup>なんぢら</sup>等<sup>みな</sup>皆<sup>しん</sup>ハリストス<sup>しん</sup>に於<sup>おい</sup>て洗<sup>せん</sup>を受けし者<sup>う</sup>はハリストス<sup>しん</sup>を衣<sup>き</sup>たり。既<sup>すで</sup>にイウデヤ<sup>じん</sup>人<sup>じん</sup>もエルリン<sup>じん</sup>人<sup>じん</sup>もなく、奴<sup>どれい</sup>隷<sup>じしゆ</sup>も自<sup>だんせい</sup>主<sup>ちよせい</sup>もなく、男<sup>けだし</sup>性<sup>なんぢら</sup>も女<sup>みな</sup>性<sup>しん</sup>もなし、蓋<sup>なんぢら</sup>爾<sup>みな</sup>等<sup>しん</sup>皆<sup>しん</sup>ハリストス<sup>しん</sup> イイスス<sup>しん</sup>に在<sup>あ</sup>りて一<sup>いつ</sup>なり。若<sup>も</sup>し爾<sup>なんぢら</sup>等<sup>みな</sup>皆<sup>しん</sup>ハリストス<sup>しん</sup>に屬<sup>ぞく</sup>せば、則<sup>すなわち</sup>アヴラアム<sup>えい</sup>の裔<sup>えい</sup>たり、且<sup>かつ</sup>許<sup>きよ</sup>約<sup>やく</sup>に由<sup>よ</sup>りて嗣<sup>よつぎ</sup>子<sup>ぎ</sup>たるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟よ、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。しかし、いったん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第4調 】

代禱) 睿<sup>えいち</sup>智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ、 アリル イ ヤ、  
ア リ ル イ ヤ。

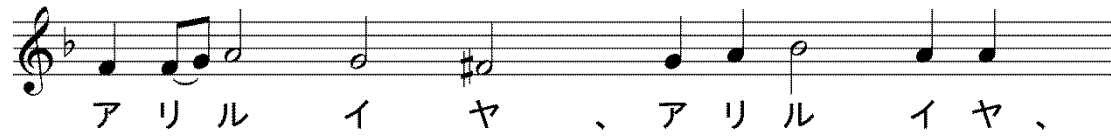
誦經) 神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>の寶<sup>ほうざ</sup>座<sup>ざ</sup>は世<sup>よよ</sup>世<sup>あ</sup>に在<sup>なんぢ</sup>り、爾<sup>なんぢ</sup>の國<sup>くに</sup>の權<sup>けん</sup>柄<sup>ぺい</sup>は正<sup>せい</sup>直<sup>ちよく</sup>の權<sup>けん</sup>柄<sup>ぺい</sup>なり、

アリル イ ヤ、 アリル イ ヤ、



ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 爾<sup>なんぢ</sup>は義<sup>ぎ</sup>を愛<sup>あい</sup>し、不法<sup>ふほう</sup>を惡<sup>にく</sup>めり、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

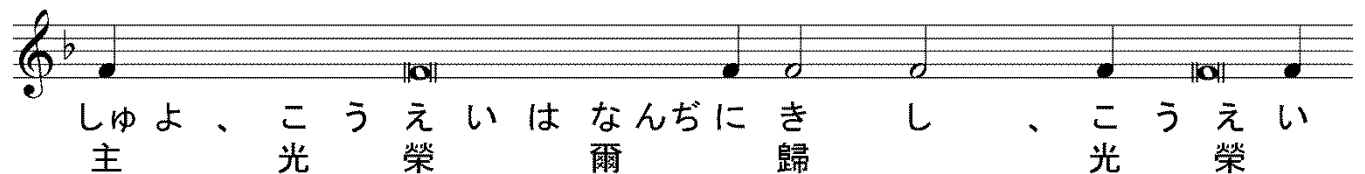


ア リ ル イ ヤ 。

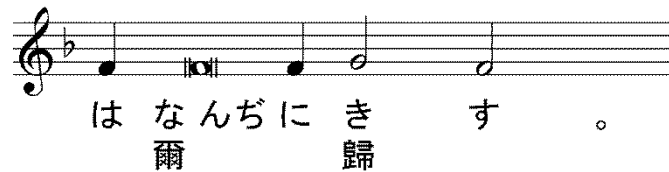
【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書47 端 10 章32~45 節 】

代禱) 睿<sup>えいち</sup>智、

代禱) マルコ傳<sup>でん</sup>の聖<sup>せい</sup>福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>經<sup>けい</sup>の讀<sup>よみ</sup>、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。  
爾 歸

代禱) 謹<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、

誦經) 彼の時<sup>か</sup>イイス、十二徒<sup>じゅうにとめ</sup>を召<sup>おのれ</sup>して、己<sup>およ</sup>に及<sup>こと</sup>ばんとする事<sup>つ</sup>を語<sup>い</sup>げて曰<sup>み</sup>えり、視<sup>われら</sup>よ、我等<sup>われら</sup>

エルサリムに上<sup>のぼ</sup>る、人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>は司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>諸<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>及<sup>およ</sup>び學<sup>がく</sup>士<sup>し</sup>等<sup>ら</sup>に付<sup>わた</sup>されん、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>之<sup>これ</sup>を死<sup>し</sup>に定<sup>さだ</sup>め、之<sup>これ</sup>

を異<sup>い</sup>邦<sup>ほう</sup>人<sup>じん</sup>に付<sup>わた</sup>し、之<sup>これ</sup>を辱<sup>はづ</sup>かしめ、之<sup>これ</sup>を鞭<sup>むち</sup>ち、之<sup>これ</sup>を唾<sup>つば</sup>き、之<sup>これ</sup>を殺<sup>ころ</sup>さん、而<sup>し</sup>して彼<sup>かれ</sup>第<sup>だい</sup>

三<sup>さん</sup>日<sup>じつ</sup>に復<sup>ふく</sup>活<sup>かつ</sup>せん。時<sup>とき</sup>にゼウエデイの子<sup>こ</sup>イアコフ及<sup>およ</sup>びイオアン彼<sup>かれ</sup>に就<sup>つ</sup>きて曰<sup>いわ</sup>く、師<sup>し</sup>よ、我<sup>われら</sup>等<sup>ら</sup>

の求<sup>もと</sup>むる所<sup>ところ</sup>、願<sup>ね</sup>わくは爾<sup>なんぢ</sup>我<sup>われら</sup>等<sup>ら</sup>の爲<sup>ため</sup>に之<sup>これ</sup>を行<sup>おこな</sup>え。彼<sup>かれ</sup>は之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、我<sup>われ</sup>が爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>の爲<sup>ため</sup>に

何<sup>なに</sup>を行<sup>おこな</sup>わんことを欲<sup>ほつ</sup>するか。彼<sup>かれ</sup>曰<sup>い</sup>えり、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>爾<sup>なんぢ</sup>が光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の中<sup>うち</sup>に於<sup>おい</sup>て、一<sup>ひとり</sup>人<sup>なんぢ</sup>は爾<sup>みぎ</sup>の右

に、一<sup>ひとり</sup>人<sup>なんぢ</sup>は爾<sup>ひだり</sup>の左<sup>ぎ</sup>に坐<sup>たま</sup>せんことを賜<sup>たま</sup>え。イイス彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>の求<sup>もと</sup>むる所<sup>ところ</sup>を知

らず。爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>我<sup>われ</sup>が飲<sup>の</sup>む爵<sup>さかづき</sup>を飲<sup>の</sup>むことを能<sup>よく</sup>するか、我<sup>われ</sup>が受<sup>わ</sup>くる洗<sup>う</sup>を受<sup>よく</sup>くることを能<sup>よく</sup>するか。彼

等<sup>ら</sup>曰<sup>い</sup>えり、能<sup>よく</sup>す。イイス彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>は我<sup>われ</sup>が飲<sup>の</sup>む爵<sup>さかづき</sup>を飲<sup>の</sup>み、我<sup>われ</sup>が受<sup>わ</sup>くる洗<sup>う</sup>を受け

<sup>しか</sup> <sup>わ</sup> <sup>みぎ</sup> <sup>およ</sup> <sup>わ</sup> <sup>ひだり</sup> <sup>ぎ</sup> <sup>わ</sup> <sup>あた</sup> <sup>あら</sup> <sup>すなわち</sup> <sup>そな</sup>  
 ん。然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與うべきに非ず、乃備えられた  
<sup>もの</sup> <sup>あた</sup> <sup>じゅうもん</sup> <sup>とこれ</sup> <sup>き</sup> <sup>およ</sup> <sup>い</sup> <sup>きど</sup> <sup>お</sup> <sup>かれら</sup>  
 る者に與えられん。十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを熅れり。イイスス彼等  
<sup>め</sup> <sup>いわ</sup> <sup>しょみん</sup> <sup>しょう</sup> <sup>おうこう</sup> <sup>な</sup> <sup>もの</sup> <sup>その</sup> <sup>たみ</sup> <sup>つかさど</sup> <sup>たいじん</sup> <sup>ら</sup> <sup>その</sup> <sup>うえ</sup> <sup>けん</sup> <sup>と</sup>  
 を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等其上に權を執る  
<sup>なんぢら</sup> <sup>し</sup> <sup>ところ</sup> <sup>ただ</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>うち</sup> <sup>か</sup> <sup>べ</sup> <sup>すなわち</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>うち</sup> <sup>おおい</sup>  
 は、爾等の知る所なり、唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中に大な  
<sup>ほつ</sup> <sup>もの</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>えき</sup> <sup>しゃ</sup> <sup>な</sup> <sup>べ</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>うち</sup> <sup>かしら</sup> <sup>ほつ</sup> <sup>もの</sup> <sup>しゅう</sup>  
 らんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、爾等の中に首たらんと欲する者は、衆  
<sup>じん</sup> <sup>ぼく</sup> <sup>な</sup> <sup>けだし</sup> <sup>ひと</sup> <sup>こ</sup> <sup>きた</sup> <sup>ひと</sup> <sup>つか</sup> <sup>ため</sup> <sup>あら</sup> <sup>すなわち</sup> <sup>ひと</sup> <sup>つか</sup> <sup>かつ</sup>  
 人の僕と爲るべし。蓋人の子の來りしも、人を役わん爲に非ず、乃人に役われ、且  
<sup>おのれ</sup> <sup>いのち</sup> <sup>あた</sup> <sup>おお</sup> <sup>もの</sup> <sup>あが</sup> <sup>ない</sup> <sup>な</sup> <sup>ため</sup>  
 己の生命を與えて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りは  
 じめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの  
 手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼  
 をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるで  
 であろう」。さて、ゼベダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたし  
 たちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いします」。イエスは彼らに「何  
 をしてほしいと、願うのか」と言われた。すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひと  
 りをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。イエスは言われた、「あなたがた  
 は自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが  
 受けるバプテスマを受けることができるか」。彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言わ  
 れた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。し  
 かし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々  
 だけに許されることである」。十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。  
 そこで、イエスは彼らと呼ばせられて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者  
 と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。し  
 かし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたい  
 と思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕と  
 ならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの  
 人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

\*\*\*\*\*

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書33 端 7 章36～50 節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) ルカ傳の聖福<sup>でん</sup>音<sup>せいふく</sup>經<sup>いんけい</sup>の讀<sup>よみ</sup>、

代禱) <sup>つつし</sup> 謹<sup>き</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、



誦經)彼の時<sup>か とき</sup>ファリセイ等<sup>ら いちにん</sup>の一<sup>とも</sup>人<sup>しよく</sup>イススに共に<sup>こ</sup>食<sup>かれ</sup>せんことを請いたれば、彼はファリセイの

家<sup>いえ</sup>に入りて<sup>い</sup>席<sup>せきざ</sup>坐せり。時<sup>とき</sup>に其<sup>その</sup>邑<sup>まち</sup>の<sup>おんな</sup>婦<sup>つみ</sup>にして<sup>もの</sup>罪<sup>かれ</sup>ある者、<sup>いえ</sup>彼<sup>せきざ</sup>が<sup>い</sup>ファリセイの家<sup>せきざ</sup>に<sup>い</sup>席<sup>せきざ</sup>坐<sup>せ</sup>する

を<sup>し</sup>知<sup>においあぶら</sup>りて、<sup>も</sup>香<sup>ぎよく</sup>膏<sup>うつわ</sup>を<sup>たづさ</sup>盛<sup>きた</sup>れる<sup>その</sup>玉<sup>うしろ</sup>の<sup>あし</sup>盒<sup>もと</sup>を<sup>た</sup>携<sup>な</sup>え<sup>なみだ</sup>來<sup>な</sup>り、<sup>な</sup>其<sup>な</sup>後<sup>な</sup>に<sup>な</sup>足<sup>な</sup>の<sup>な</sup>下<sup>な</sup>に<sup>な</sup>立<sup>な</sup>ち、<sup>な</sup>哭<sup>な</sup>き<sup>な</sup>て、<sup>な</sup>涙<sup>な</sup>

を<sup>もつ</sup>以<sup>その</sup>て<sup>あし</sup>其<sup>うるお</sup>足<sup>おのれ</sup>を<sup>こうべ</sup>濡<sup>け</sup>し、<sup>もつ</sup>己<sup>これ</sup>の<sup>の</sup>首<sup>の</sup>の<sup>ご</sup>髪<sup>その</sup>を<sup>あし</sup>以<sup>せつぶん</sup>て<sup>これ</sup>之<sup>においあぶら</sup>を<sup>い</sup>拭<sup>い</sup>い、<sup>い</sup>其<sup>い</sup>足<sup>い</sup>に<sup>い</sup>接<sup>い</sup>吻<sup>い</sup>して、<sup>い</sup>之<sup>い</sup>に<sup>い</sup>香<sup>い</sup>膏<sup>い</sup>

を<sup>ぬ</sup>抹<sup>かれ</sup>れり。<sup>かれ</sup>彼<sup>まね</sup>を<sup>これ</sup>招<sup>み</sup>きたる<sup>おのれ</sup>ファリセイ<sup>うち</sup>は<sup>い</sup>此<sup>こ</sup>を<sup>ひとも</sup>見<sup>よげんしゃ</sup>て、<sup>い</sup>己<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>此<sup>い</sup>の<sup>い</sup>人<sup>い</sup>若<sup>い</sup>し<sup>い</sup>預<sup>い</sup>言<sup>い</sup>者<sup>い</sup>たら

ば、<sup>かれ</sup>彼<sup>さわ</sup>に<sup>もの</sup>捫<sup>だれ</sup>る<sup>いか</sup>者<sup>おんな</sup>の<sup>し</sup>孰<sup>し</sup>たり、<sup>い</sup>如<sup>い</sup>何<sup>い</sup>なる<sup>い</sup>婦<sup>い</sup>たる<sup>い</sup>か<sup>い</sup>を<sup>い</sup>知<sup>い</sup>らん、<sup>い</sup>蓋<sup>い</sup>是<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>罪<sup>い</sup>女<sup>い</sup>なり。<sup>い</sup>イスス<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>に

答<sup>こた</sup>えて<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>シモン<sup>い</sup>よ、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>に<sup>い</sup>言<sup>い</sup>う<sup>い</sup>べ<sup>い</sup>き<sup>い</sup>事<sup>い</sup>あり。<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>く、<sup>い</sup>師<sup>い</sup>よ、<sup>い</sup>之<sup>い</sup>を<sup>い</sup>言<sup>い</sup>え。<sup>い</sup>イスス<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>え

り、<sup>い</sup>或<sup>い</sup>債<sup>い</sup>主<sup>い</sup>に<sup>い</sup>二<sup>い</sup>人<sup>い</sup>の<sup>い</sup>負<sup>い</sup>債<sup>い</sup>者<sup>い</sup>ありて、<sup>い</sup>一<sup>い</sup>人<sup>い</sup>は<sup>い</sup>銀<sup>い</sup>五<sup>い</sup>百<sup>い</sup>枚<sup>い</sup>、<sup>い</sup>一<sup>い</sup>人<sup>い</sup>は<sup>い</sup>五<sup>い</sup>十<sup>い</sup>枚<sup>い</sup>を<sup>い</sup>負<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>其<sup>い</sup>償<sup>い</sup>

う<sup>あた</sup>能<sup>よ</sup>わ<sup>かれ</sup>ざる<sup>ふたり</sup>に<sup>ゆる</sup>因<sup>しか</sup>りて、<sup>ふたり</sup>彼<sup>うち</sup>は<sup>かれ</sup>二<sup>あい</sup>人<sup>い</sup>に<sup>い</sup>免<sup>い</sup>せり、<sup>い</sup>然<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>二<sup>い</sup>人<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>に<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>を<sup>い</sup>愛<sup>い</sup>す<sup>い</sup>る<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>孰<sup>い</sup>か<sup>い</sup>多<sup>い</sup>からん、

こ<sup>こ</sup>ろ<sup>い</sup>み<sup>い</sup>に<sup>い</sup>言<sup>い</sup>え。<sup>い</sup>シモン<sup>い</sup>對<sup>い</sup>えて<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>意<sup>い</sup>う<sup>い</sup>に、<sup>い</sup>多<sup>い</sup>く<sup>い</sup>免<sup>い</sup>され<sup>い</sup>し<sup>い</sup>者<sup>い</sup>ならん。<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>は<sup>い</sup>之<sup>い</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>

が<sup>は</sup>議<sup>ただ</sup>り<sup>こ</sup>し<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>正<sup>い</sup>し。<sup>い</sup>是<sup>い</sup>に<sup>い</sup>於<sup>い</sup>て<sup>い</sup>婦<sup>い</sup>を<sup>い</sup>顧<sup>い</sup>み<sup>い</sup>て、<sup>い</sup>シモン<sup>い</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>此<sup>い</sup>の<sup>い</sup>婦<sup>い</sup>を<sup>い</sup>見<sup>い</sup>る<sup>い</sup>か、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>

爾<sup>なん</sup>の<sup>い</sup>家<sup>い</sup>に<sup>い</sup>入<sup>い</sup>り<sup>い</sup>し<sup>い</sup>に、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>は<sup>い</sup>我<sup>い</sup>が<sup>い</sup>足<sup>い</sup>の<sup>い</sup>爲<sup>い</sup>に<sup>い</sup>水<sup>い</sup>を<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え<sup>い</sup>ざ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き、<sup>い</sup>然<sup>い</sup>る<sup>い</sup>に<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>は<sup>い</sup>涙<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>我<sup>い</sup>が<sup>い</sup>足

を<sup>うるお</sup>濡<sup>こうべ</sup>し、<sup>け</sup>首<sup>もつ</sup>の<sup>これ</sup>髪<sup>の</sup>を<sup>ご</sup>以<sup>なん</sup>て<sup>ち</sup>之<sup>われ</sup>を<sup>せつぶん</sup>拭<sup>しか</sup>えり。<sup>かれ</sup>爾<sup>わ</sup>は<sup>こ</sup>我<sup>こ</sup>に<sup>こ</sup>接<sup>こ</sup>吻<sup>こ</sup>せ<sup>こ</sup>ざ<sup>こ</sup>り<sup>こ</sup>き、<sup>こ</sup>然<sup>こ</sup>る<sup>こ</sup>に<sup>こ</sup>彼<sup>こ</sup>は、<sup>こ</sup>我<sup>こ</sup>が<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>に

入<sup>い</sup>り<sup>い</sup>し<sup>い</sup>時<sup>い</sup>より、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>が<sup>い</sup>足<sup>い</sup>に<sup>い</sup>接<sup>い</sup>吻<sup>い</sup>して<sup>い</sup>已<sup>い</sup>め<sup>い</sup>ず。<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>は<sup>い</sup>我<sup>い</sup>が<sup>い</sup>首<sup>い</sup>に<sup>い</sup>油<sup>い</sup>を<sup>い</sup>抹<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ざ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き、<sup>い</sup>然<sup>い</sup>る<sup>い</sup>に<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>は

に<sup>い</sup>お<sup>い</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ぶ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ゆ<sup>い</sup>え<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>なん<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>かれ<sup>い</sup>お<sup>い</sup>お<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>み<sup>い</sup>ゆる<sup>い</sup>け<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>しか<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>お<sup>い</sup>お

く<sup>あい</sup>愛<sup>しか</sup>せり、<sup>い</sup>然<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>も<sup>い</sup>少<sup>い</sup>く<sup>い</sup>赦<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>者<sup>い</sup>は、<sup>い</sup>少<sup>い</sup>く<sup>い</sup>愛<sup>い</sup>す<sup>い</sup>る<sup>い</sup>なり。<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>婦<sup>い</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>の

罪<sup>つみ</sup>は<sup>ゆる</sup>赦<sup>かれ</sup>さる。<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>と<sup>い</sup>共<sup>い</sup>に<sup>い</sup>席<sup>い</sup>坐<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>者<sup>い</sup>己<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>に<sup>い</sup>言<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>此<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>何<sup>い</sup>人<sup>い</sup>に<sup>い</sup>して<sup>い</sup>罪<sup>い</sup>を<sup>い</sup>も<sup>い</sup>赦<sup>い</sup>す<sup>い</sup>か。<sup>い</sup>彼

婦<sup>おんな</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>の<sup>い</sup>信<sup>い</sup>は<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>を<sup>い</sup>救<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>安<sup>い</sup>然<sup>い</sup>と<sup>い</sup>して<sup>い</sup>往<sup>い</sup>け。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、

ひとりは五百デナリ、もうひとりは五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいつた時から、わたしの足に接吻をしてみななかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸 す。

※聖体礼儀③ へ